

BCS

PRIZE-WINNING WORKS



BCS賞受賞作品探訪記

27

第二七回受賞作品（一九八六年）

新潟市美術館

後編

新潟市美術館は展示室を巡りながら、いろいろな庭に出会うことができる。前編は、指名設計競技によって、前川國男の出生地に作品がつけられた経緯を紹介した。後編は、新潟市で当時初めて施工された打ち込みタイル、美術館の運営努力などを紹介する。

仕事の区別なく 一つの建築をつくりあげる

新潟市美術館は新潟市の建設会社加賀田組・福田組JVによって施工された。一九八三年七月に着工し、工期は一年五カ月が予定されていた。だが、さまざまな点で初めての体験が待ち受けていた。当時、加賀田組で現場主任を務めた阿部清氏が着工前の状況を振り返る。「経験したことのない工法が多かったので、前川國男建築設計事務所の高橋設計チーフに、着工前に実物大の模型をつくりましょうとお話すると、チーフも同じお考えでした。現場所長の意見

も一致して、ワンスパンのモックアップをつくりました」。模型は「外壁の打ち込みタイル」「小巾板のコンクリート打ち放し仕上げ」「薄肉PC版擬石仕上げの打ち込み」をつくり、これら工法を美術館の外部施工の三大要素ととらえたという。

事前に模型をつくる取組みは、前川國男建築設計事務所と施工JVの間でよく行われていた。高橋義明氏も模型づくりの段階から施工関係者を巻き込んでいく。「打ち込みタイルにしても、一枚のタイルの重量がどれだけあるか、実際に持ってみなければわからないでしょう。すると、それに耐え



企画展示室とエントランスホール(写真奥)を結ぶスロープ。美術館は砂丘地のなだらかな起伏に従って建てられている。左手の開き戸から「海の庭」に出ることができる。



エントランスホール。左はエントランスブースと受付。受付の背後はミュージアムショップ。新潟市でデザインショップを開いている若い人たちの手で運営され、活気を生んでいる。



常設展示室ロビー。高さのある窓から「山の庭」の風景が目に入ってくる。新潟の長い冬のくもり空を晴らすように、天井はブルーの色に塗装されているという。開口部のサッシはコールテン鋼（耐候性鋼）の枠にペアガラスを入れて製作。枠とガラスの接触部分を断熱し、結露を抑えている。

に、まとまっています」。まとめ役を前川國男建築設計事務所の常駐の担当者が果たし、工事の種類は違っても、皆が一つの建物をつくっていることを意識する流れができあがっていたという。

工種を超えた取組みは、企画展示室の間仕切りパネルの製作、施工でも発揮された。照明の当たり方を見ながら、パネルの設置方法を検討、調整するといった協同作業である。一方で塗装などの色の決め方、仕上げ材の選択なども丁寧に行われ、実際に複数の見本をつくった中から絞り込んで、やっと承

認のゴースインを得るといふ凝り方だった。美術館の内部は、日常的に親しめる規模の中で、充実した広さの展示室をゆったりと巡っていくことができる。スロープやロビーは庭に面して大きな開口が取られ、たとえば絵画鑑賞に集中した緊張を解すこともできる。三室ある企画展示室の境には小振りな「ランタン」と呼ばれる小スペースが設けられ、これも外構の庭に面して安らぎを得ることができ。外から眺めても、打ち込みタイルの壁面に、ガラスとコールテン鋼サッシの質感がよく似合う。



右／企画展示室。3つの企画展示室があり、一つは天井高を高く設定されている。ポストテンション梁を採用することで途中に柱の無い大きな空間を生み出している。
上／緊張させた梁端部の所在を意匠としても表している。



るには型枠をどれだけ強くしなければいけないか考えられます」。現場施工の打ち込みタイルの工程は、かなり豪快かつ細やかだ。型枠合板に栈木を取り付け、そこに後ろからタイルを手で釘留めする。このときタイルの耳が隣のタイルに少しずつ組み合わさる形で固定される。内部に配筋し、タイルの穴を通して型枠にセパレータをセットし、コンクリートを打設する。ここで型枠材がしっかりとついていないとタイルの重さでぐらつき、打ち込み精度が出ない。さらにコンクリートの打設にもコツがいるという。「コンクリートをタイルの裏側に隔々まで行き渡らせるためには、バイブレーターでは限界があるんです。外壁側に寄せれば、ダブル配筋の壁なので鉄筋を痛め、タイルが落ちたり割れたりします。ですから人力で、一メートルくらいの間隔で現場の人間が並び、長い竹で突きながら、あるいは型枠の上から叩きながら、打設するんです」と阿部氏。「打ち込みのときには建築以外の設備、電気といった担当者も一緒に作業するよう

施工者より

若手が力を集結し、
想いを一つに突き進みました



株式会社加賀田組新潟支店
常務執行役員 副支店長
阿部清 Kiyoshi Abe

当時、新潟市美術館の仕事と並行して、県庁舎の工事があり、美術館は社内の若手が担当していました。経験は浅いものの、フットワークは軽く、行動力で未知の仕事に向かっていた記憶があります。なにしろ前川國男氏は、教科書に載っている方ですからとても緊張していました。

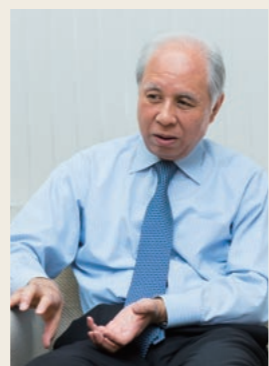
着工前に問題点を洗い出して、実物大の模型をつくり、杉の小巾板で組み立てた柱型枠にコンクリートを打ち込んだら、ちよつとピンホールが出てしまいました。そ

のことを気にしているところへ前川さんが見えられました。あとで高橋チーフに感想を聞くと、「人が手作りでやるんだからこそ、こういう表情が出ていいんだ」とおっしゃったそうです。そのときは安堵の気持ち反面これからの大変だという思いでいっぱいでした。

また、打ち込みタイルは脱型も結構手間が掛かるんです。型枠を外して、足場を解体し、やっとタイルが見えてきたときはうれいものでした。足場の解体も終わるころ、私が表に出ていると、通りがかりのご婦人が「タイルの色が新潟らしい、いい色ですね」と褒めてくださったんです。すると傍らで高橋チーフがそれを聴いておられて、「こつ」とされました。喜んでおいでだったんでしょう。施工は大変なことが多かったのですが、みんなが同じ目標を持って一つにまとまったとき、人の力は大きなものになることを学んだ仕事でした。

管理・運営者より

スタンダードな建築の魅力を多くの
市民に知ってもらいたい、大切にしたい



新潟市美術館館長
塩田純一 Junichi Shioda

私が館長に就任してから四年目になります。新潟市美術館は今年三〇周年を迎えますが、コレクションにしても、長年の活動にしても館にはすでに蓄積があります。それに建物の前川國男の建築であることはたいへん大きな財産です。私の役割は、これらをいかに有効に活用し、生かしていくかにあります。現在、流行しているガラス張りの建築も日本の建築の一面だと思いますが、この館のようなかっちりとしたスタンダードな建築を、あらためて新鮮に感じると言

ってくださいる方も多くなっています。時代は一巡りしてきているのかもしれません。

今後は、次世代の子供たちが美術館に親しみ、学べる場になりたいと思っています。そのための取組みも続けています。オーブンギャラリーといって、美術館から小学校へ送迎バスを出して来てもらい、授業の場にする。それと双方向で、作家さんたちに小中学校へ行ってもらって、子供たちと一緒に作品をつくるプログラムもあります。

また昨年は、子供の頃にこの美術館に来ていて、現在プロのアーティストとして世界的に活躍している人たちの展覧会を開きました。彼らにとって美術館といえはこの場所が刻み込まれ、展示室の使い方方も斬新でした。前川建築の新たな魅力を引き出して、市民の皆さんに体験してもらおうことも大切だと感じています。

信濃川治水に携わった 前川の父とともに紹介

市民に待望されてオープンした
新潟市美術館も、時代の変化の中



常設展示室。地元が輩出した芸術家の作品展示、収蔵ともに充実させ、新潟に根付いた美術館とするために、1994年に増築された。前川國男建築設計事務所では増築を見越して、将来必要となる2階収蔵庫を簡易につくっておくことを提案。増築時に仕上げを施した。

で浮き沈みを経験してきたという。新しい水族館や県立美術館の設置、バブル経済の崩壊による予算削減などで、九〇年代末から次第に館の運営が苦しくなっていた。その時に浮上したのが、『生誕一〇〇年前川國男建築展』（二〇〇六年六月一七日〜同年八月十六日）の開催だった。「当時、この美術館を設計した前川さんが新潟市生まれの建築家ということを知ると、市民はほとんど知らない状態でした。前川さんの没後二〇年の節目を機に当館をあらためて訪れ、郷土の生んだ偉大な建築家の足跡をみてもらいたいとの気持ちから企画したのです」と、美術館で長年企画運営に携わってきた学芸係長の松沢寿重氏。同展は、新潟市美術館のほか、前川ゆかりの東京、弘前、福岡でも開催され、盛況裡に終了した。また、テレビ番組の放送も反響を呼び、新潟が輩出した優れた建築家として前川があらためて認知された。

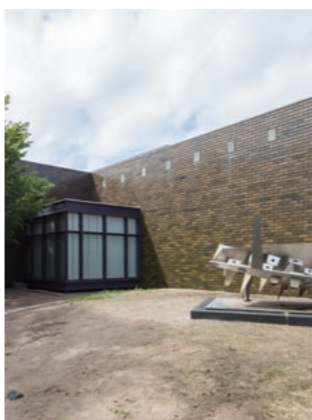
さらに、松沢氏はもう一步踏み込んで、前川國男の父・貫一の業績と関連付けて、紹介をすること

にした。貫一は内務省土木局の技師として一八九八年から約一〇年新潟に赴任して、信濃川改修工事を担当し、大河津分水の調査・設計に携わったという。赴任中に國男が誕生したのだ。新潟市民にとって、信濃川の治水工事は関心の高い歴史的な大事業であり、その息子が設計した美術館の存在は強く印象付けられた。

風雪に耐えて 文化を生み出す美術館

新潟市美術館は今年の秋に三〇周年を迎える。「これまで一〇年目には常設展示室・収蔵庫の増設が、二〇年目には設備を中心とした大規模改修が行われ、美術館としての機能が高まりました。現在は三〇周年目として、国宝・重要文化財を展示できる施設として、文化庁・東京文化財研究所の助言を活かし、空調・照明環境のバージョンアップをはかった更新や、講堂、図書コーナー、多目的スペースの充実を目指しています。三〇年前の設計時を振り返ると、展示室内へ塩害を引き込まないことが

求められ、その除去方法を提案し、三〇年間塩害から守られると同時に天井に汚れが一切生じなかったことも、健全な建築としての証しとなり、前川さんの言う百年もつ建築の流れに乗り始めたと思えます」と前川建築設計事務所取締役・濱興治氏。これらの改修設計・施工には、前川國男建築設計事務所、加賀田組が竣工後から引き続き関わり、継続的なメンテナンスがなされてきた。今後も生き続ける美術館の姿に、熟成を重ねる文化の美しさを感じ取っていきたい。



企画展示室が連続する南側の庭。タイルの外壁の左側は第1、右側は第2企画展示室。2室の境に休憩室が設置されている。前川國男建築設計事務所では「ランタン」と呼ばれ、美術館の計画ではたびたび取り入れられ、くつろぎの場となっている。